甘酸っぱいモノ

千龍風爽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
甘酸っぱいモノ

【Ｎコード】
Ｎ４１４９Ｕ

【作者名】
千龍風爽

【あらすじ】
友達だったはずだよね？でも何でなの？私達の関係どうなちゃったの？
新蘭でオリキャラあり。

甘酸っぱいモノ：01

彼女は空河日向といった
内気で自己主張が出来ず、またいじめられっこ

「ったく、空河、また来たの！？ったく、諦めが悪いわねぇ。」

日向のクラスメートが声をかける
日向は小さく蹲る

「まぁまぁ、紗沙（さしゃ）、もう行こうよ、あんな奴、相手するだけ時間の無駄だって！そうそう、今からサッカー部の練習やってんだ！工藤君の活躍見に行こうよ！！」

女子生徒は何人かの生徒を連れて教室を出て行った

日向は1人座る

工藤新一の隣だ。そのとき、日向はあるモノを見つけた

「…工藤君のかな…。」

拾ったのは新一のタオル。スポーツ系の男子には欠かせないもの

日向は新一のタオルを握り、少し迷い始めた

渡すか渡すまいか

しかし困っていたら困ると思い新一が練習しているグラウンドへと

タオルをもっていくことにした

「キャァーっ！工藤せんぱぁーいっ！！コッチむいてぇー！」

グランドのネットから携帯を用意して手を振る女子軍団

新一は苦笑しながらも一応、女子のほうを一瞬だけ向いた

そして練習が終わると女子の大群は一気に新一のところへと向かう

蘭は女子の大群の中を苦戦しながらも通っていく

「新一、お疲れ様〜。…あぁっっ！！いけない！！ゴメン、新一、タオル教室に忘れちゃったみたい。
まずは一応、水筒と渡しておくから。ちょっと待って」

「…あの、これ、忘れ物ではありませんか？落ちてました。」

日向が口を挟んだ
蘭は日向のほうに振り向く

日向は新一にタオルを渡した

新一は「サンキュー」とやんちゃ顔で礼を言う

「ひなちゃん、有難う。新一もゴメンね、次回から気をつけるよ！」

蘭は新一の頬を突っつきながら謝る
新一は「ヤメロー」と棒読みで蘭の手をつかむ

周りから見れば羨ましいバカップル。しかし裏を返せば…

「自分達が出来ないことをあの女が人目を気にせずに堂々とやっていて憎たらしい」ということ。

日向は少しだけその様子を見ると小さく会釈をして教室へと戻ろうとした
しかしそのとき

「ちょっと、空河！アンタ、何勝手に抜け駆けしてんの！？超ウザいんですけどぉ。」

と何人かの女子生徒が日向の前へ来た
周りがざわついた

「私、そんなつもりはないんです。ただ忘れていたから届けに行っただけです。」

日向はそういいながらその場を去ろうとする

「何言ってんのよ！！そんな嘘通用するわけないでしょ？」

女子生徒は更に怒る

「紗沙ちゃん、ひなちゃんはそんな気持ちでやったわけじゃないと思う！！ただ困ってる人がいると思っただけじゃないかな。」

蘭が庇う
日向は下に向けていた泣きそうな顔を上へ上げた

「毛利さん…、有難う。」

日向は蘭に抱きついた
蘭はうんうんと頷いて日向を優しく包み込むように抱きしめた
日向は嬉しさのあまりその場に崩れるように座り込んだ
蘭は立ち上がった

「新一、新一もひなちゃんにもう1回、ちゃんとお礼言ってよ！新一の必需品のタオル持って来てくれたんだから！！」

蘭は新一のわき腹を突っついて言った
新一は蘭の方を苦笑しながらジト目で睨んだ

「んなん、わあってるっつーの。空河、サンキューな。マジで助かった。」

新一は日向に手を差し伸べてお礼を言った
日向は新一の手を握って、立ち上がり、スカートについたホコリをはらった
そして赤面して、その場を去ってった

「…恥ずかしい。ただでさえ私、目立ったら目をつけられる存在なのに…。さっき思い切り目立っちゃったよ…。」

日向は教室に帰る途中、ずっとそうやって呟いていた
教室に入るとまだ、女子生徒は他の部活を見に行っているのか、男子生徒数名と新一、そして蘭しかいなかった

蘭は新一の机の元にいた
日向は邪魔をしないようにと教室から去ろうとした

だが…

「ひなちゃんもコッチに来て喋ろうよ！！」

と蘭に誘われた
日向は自分の意見を主張できない＝断れないため、自分の席に座った

「でね、昨日、新一ったらね。」

蘭は新一の失敗談などを面白おかしく話す、そして新一は焦ったり苦笑したりの繰り返し。
日向は蘭の話を聞いて、小さく笑っていたが本心は全然笑う気にもなれなかった

「…いいなぁ、毛利さん。」

小さく呟く日向

蘭は「え？」と聞き返す

「だって工藤君と幼馴染で、女子の目を気にしないで話せて、本当に見てると恋人さんみたいなんですもの。
いいなぁ、羨ましいな。」

と日向
蘭はその言葉を聞くと

「じゃあ、毎日、話そうよ！！私もっと、ひなちゃんと友達になりたいの！！ね？ね？いいでしょう？」

と日向の手を握って聞く
日向は少し目を丸くして「私なんかで本当にいいの？」と聞き返す
蘭は「勿論！！むしろ、ひなちゃんがいいの！」と笑顔で返す
日向は驚いた表情をしていたが、すぐに笑顔になり、蘭に抱きついた

「なぁ、蘭、さっさと菓子くれよー、腹へってしょうがない。」

新一はなっているお腹を押さえながら蘭に強請る
蘭は「しょうがないわね」といい、スクールバッグからお菓子を取り出し新一に上げた
新一は目を輝かして、そうまるで1人の幼い少年のようにお菓子を受け取り袋を開けて食べ始めた

差し入れは新一の大好きなレモンパイ。

一切れだが新一には大きなホールに包まれているレモンパイに見える

すぐに新一は平らげてしまった

「蘭ちゃんって、お料理上手なんだね。私なんかお料理全然出来ないんだ。」

苦笑しながら言う日向
蘭は照れ笑いしている

「お母さんがお父さんと別居してるから、自然になれちゃってね。」
と蘭
「あ、ゴメンね。傷つけちゃったね。」
と日向
蘭は手を振って「大丈夫」といっていたが日向にとっては小さい傷が出来てしまった
「大丈夫だ、蘭は体も強ぇけど心も強ぇからよ！！」
と新一
蘭は新一をジト目で睨む
苦笑する新一
「そうだ、空河、席が隣だから仲良くやってこうぜ！宜しくな！」
新一は手を差し伸べた、今度は仲良くしようという握手という意味で。
日向は少し戸惑ったが、握り返した
日向は握ったとき、思った

ー工藤新一に恋をしてしまったー

と…

甘酸っぱいモノ：０１（後書き）

何かありましたらお願いいたします。感想等も待ってます。

ｂｙ千龍風爽

甘酸っぱいモノ：02

「工藤君、蘭ちゃん、お早う。」

「あ、ひなちゃん、お早う！」

日向は学校が楽しくなった
蘭と新一がいたから

特に恋をしてしまった新一がいたから

しかし日向は蘭とどう接していいのか分からなかった
多分、蘭も新一が好きだと悟ったから

日向は人の気持ちや感情等を読み取ることが上手い

「今は何を話してたの？」

日向は鞄をおきながら聞いた

「昨日、新一の家で話した出来事よ。」

と蘭、日向は目を丸くする
しかし

「あ、そうなんだ、そうだよね、幼馴染だもんね、幼馴染となら一夜を過ごすこともあるよね。」

と苦笑しながら自分の席に座った
蘭は少し日向の様子を伺った

そのとき

「空河、ちょっとさ、アンタ、調子乗りすぎなんじゃない？工藤君と笑いながら話してさぁ、アタシら、話したことないのにさ、毛利と混じってニコニコ？
　ふざけてんじゃねーよっ！！」

と何人かの女子生徒が日向に怒鳴りに来た

日向は蹲る

「あれ、何これ、新作じゃない？えっとさぁ、あれ！！新色リップ！！」

何人かの女子生徒のうちの1人が日向の鞄を漁り見つけた
日向は「止めて」という

「アンタ、何？調子乗りすぎ。この新色リップ、超、レアモノなんだってねぇ、何であんたが持ってるの？」

例の女子生徒、紗沙が日向の前髪をつかんで聞く

日向の家は言いふらしてはいないが、結構なお金持ち。そして父親が日向が持っている新色リップの製造会社、すなわち1つの会社の大社長。

鈴木財閥ほどではないが一応有力者のうちの1人

「紗沙ちゃん、止めなよ！ひなちゃん、嫌がってるじゃない！！」

蘭がとめる
しかし

「あんたには関係ないでしょ？口出しすんな！！」

と紗沙に突き飛ばされてしまった
運がいいのか新一が支えてくれた

「オメーら、蘭に何てことすんだよ！…つーかさ、親に人の嫌がることは止めましょうってガキん頃に言われなかったのか？」

新一が怒る
紗沙たちは少し焦った
そして舌打ちをして去っていった

「工藤君、有難う。」

礼を言う日向
少し頬が赤い

蘭は日向の顔を見たとき、一瞬、鳥肌が立った

その日の放課後、日向は教室に蘭を呼び出した

「ひなちゃん、どうしたの？」

と蘭、日向は躊躇っているように見えた
そして小さく深呼吸をして蘭を真剣な目で見つめる。

「あのね、蘭ちゃんに、私、酷いことしちゃったの。」

と日向
蘭は目を丸くする

「ひなちゃん、何言ってるの？私、ひなちゃんにいやなコトされてないよ。」

と蘭

「ううん、そうじゃないの。」

日向は悲しい笑みを蘭に見せた
そして…こういった

「蘭ちゃん、ゴメン。私、工藤君のこと、好きになったのかもしれない。」

と。蘭は頭の中が真っ白になった

予想が的中したから…

甘酸っぱいモノ：０２（後書き）

次回も宜しくお願いいたします。

ｂｙ千龍風爽

甘酸っぱいモノ：03

「…新一を…好き？」

蘭は恐る恐る聞く
日向は躊躇っているようだったが最後には頷いた

蘭は絶句した

「…御免なさい、好きになろうって思ってたわけじゃないんだ。でも助けてくれたり、一緒に話してるうちに…。
でっでも、蘭ちゃんが工藤君を好きだって分かってるから、私は別に奪ったりしないよ？
だって蘭ちゃんの彼氏さんだし、蘭ちゃんとライバルじゃなくて友達でいたんもん。
だから私は工藤君を好きだって気持ちを心の中にしまっておく。だから蘭ちゃん、気にしないでね。
私ね、実を言うと人の顔でこの人はこういう風に思ってるんだっていうことを感じ取るって言うか、読み取るっていったら変になっちゃうのかな？まぁ、分かるんだ。
工藤君の顔とか様子を見てると多分、蘭ちゃんのコトを好きじゃないかなって。」

と日向
蘭は少し下向けだった顔を上にあげる
「新一が？」
聞き返す蘭

「うん、多分、好きだと思う。顔の様子から…。でも人の心なんて読めるほうがおかしいのよ。
気にしないで。じゃあ、私、そろそろ…帰るね。今日、用事があるから。」

日向は微笑しながら蘭にいい、教室を後にした
蘭は「うん、バイバイ」と日向にいつものように手を振って別れ、少し教室に残って、教室を後にした

日向は帰宅途中、溜め息をついていた
誰もいない公園で1人ブランコをこぐ

「…諦めなきゃいけないんだもん、新しい恋を見つけなきゃ。でも
…ううん!!駄目だよ!!
だって蘭ちゃんの…ぅっ…」

無意識に流れてくる涙
声を立てずに日向は泣いていた
1粒の大粒の涙が地面に零れ落ち、地面に染まった

「空河、何で泣いてんだ?」

日向は声のしたほうを見た

「…工藤君！！」

そう、新一だった

新一は日向の元へやってきた

日向は涙を拭いブランコから降り立ち上がった

「ううん、何でもない。バイバイ。」

日向は新一を避けるようにその場を去った

「何でそんなに優しくしてくれるの？もっと好きになっちゃうじゃない。

もう放っといて。蘭ちゃんとシアワセになるんだから」

日向は帰りながらずっとその言葉を呟いていた

甘酸っぱいモノ：０３（後書き）

短いですが次回も宜しくお願いいたします。感想等もお待ちしております。

ｂｙ千龍風爽

甘酸っぱいモノ：０４

次の日

「蘭ちゃん、お早う！」

蘭に挨拶する日向、蘭は「お早う、ひなちゃん」と元気よく挨拶を返す
しかし日向の顔はすぐに暗くなった。なぜなら蘭のすぐ傍に新一がいたから

「よう、空河！」

新一も「よぅ」と手を上げて挨拶
日向は一応、明るく振舞い「お早う、工藤君！」と挨拶を返す
しかし日向は乗り気ではなかった

日向は鞄を置くとすぐに早足で教室を出て行った

「かなちゃーん。」

日向は自分の隣のクラスへと足を運んだ

「かなちゃん」という女子生徒はすぐに出てきた

「おぉー、珍しいじゃん、日向があたしの教室に顔を出しに来るなんて…お？」

かなちゃん、本名、久野（くの）かなたの胸に顔をうずめる日向

「もう、かなちゃぁん。」

泣きつく日向
かなたは状況を飲み込めず「どうした？どうしたの？」と優しく声をかける

日向はあれやこれやを話した

「そっかぁ…、まぁ、工藤君と蘭はね…。でもよく頑張ったぁっ！！えらいえらい。」

かなたは笑顔になり、日向の頭を撫でる
日向は「うわーん」と泣いた

チャイムが鳴ると日向は、かなたと別れ教室へと戻った

「ふぅ…。」

溜め息をつく日向
そのとき

「なぁなぁ、空河、頼みがあんだけどさ、いい？」

新一が話しかけてきた
日向は少し心が痛くなる

「…何？」

と日向

「宿題めんどくさくて、やってねぇんだ、だからさ、答えだけでいいから写さしてくれ。」

頼むという手をして頼む新一
日向は怒った顔に…
勢いよく椅子から立ち上がったと思ったら…

「そんなの蘭ちゃんに頼めばいいじゃない！！私、写させないから！…あ…。」

と大声で怒ってしまった。
興奮したのか荒い息を立てている

しかし日向は大きな声を出してしまったため、皆の注目の的。

日向はすぐに座った
新一は　？　を浮かべていた

蘭が来て「はい、これ、宿題のノートだよ」といい、ノートを新一に渡した
新一は笑顔で「サンキュー。」と例をいい、すぐに写し始めた

蘭は日向をみて

「ひなちゃん、ゴメン。」

と謝った

日向は「私のほうこそ…。」と頭を下げた

そのとき、担任が来て朝のＨＲ（ホームルーム）が始まった

甘酸っぱいモノ：０４（後書き）

次回も宜しくお願いいたします。

ｂｙ千龍風爽

甘酸っぱいモノ：05

「ねぇねぇ、テストどうだった？」

今日は中間テストだったらしい
クラス中、いや、学校中でテストのコトを話し合っている

「ってかさぁ、由和の奴、予告もなしにあの、計算入れるんだから
さぁ、マジうざーい。」

と愚痴を言うものもいた

そんな中、日向は帰りの準備をして、席に座って待っていた

「ねぇねぇ、ひなちゃんテスト、どうだった？」

蘭がやってきて、日向に聞く
日向は少し考えて、

「結構、勉強したところ、山が当たって結構、出来たんだ。」

と日向

蘭は「へぇ、すごいねぇ。やっぱりひなちゃんは頭いいんだ。」と褒めている
日向は「そんなことないよ」といいながらも少し嬉しそう

「蘭、俺は出来たぞー。やっぱり今回も…」

鼻を伸ばす新一に蘭は苦笑しながら怒っている

「はいはい、いっつーも学年1位の人には言われたくありませんよーっだっっ!!」

ベロベロバーをして蘭は自分の席へ戻っていった

その1週間後、学年順位が発表されるコトになった
皆、ドキドキワクワク
紙がはり出され、自分の順位を確認してる

「…ぁ。」

日向は言葉も出なかった
なぜなら…

1．工藤新一・空河日向

と書かれていた
つまり、新一と同じ点数だった
日向は皆に気付かれないように教室へと向かった

「…はぁ。」

鞄を置き、溜め息をつく日向
そのとき、新一と蘭が入ってきた

日向は新一と目を合わせないように教室を後にしようとしたが

「ちょっと、何で空河、工藤君と同じ順位なのよ！？」

と紗沙率いる、女子軍団に絡まれてしまった

「別に悪気はないです。」

日向は蹲りながら言う
しかし…

「アンタが勉強しなければ良かったんだよ！！そしたら工藤君だって気持ちよくテストを終えられたんだからさぁ。
ねぇ？工藤君に謝んなよ！！」

紗沙は日向を突き飛ばし、言った
紗沙の仲間も「謝れ」と連呼

「紗沙ちゃん、やりすぎだよ！！何でひなちゃんが謝らなきゃいけないの！？
ほら、新一も何か言ってやってよ！！」

と蘭

「俺、別に順位とかどうでもいいんだ、だから別に空河に謝ってもらう理由はねぇんじゃねぇか？
当の本人＝俺が謝れって言うなら話は別だけどな。」

新一は日向の元へ行き、突き飛ばされて、跪いていた日向に手を貸し、起き上がらせながら言う
紗沙は

「でも工藤君が傷つくと思って…」

と焦りながらも言い訳

「俺が希望してない。」

しかし新一が口を挟む
日向は目を丸くした

紗沙たちは教室を恥ずかしさのあまり赤面しながら後にした

「…工藤君、有難う。でもね、もういいよ、工藤君は蘭ちゃんのところにいてあげて。」

日向は涙ぐんでお礼を言うと、新一の手を離し、蘭のほうをむいていった

そして教室を後にした

光る涙をこぼしながら…

新一は意味が分からなかったがその場に立ち尽くすしかなかった

甘酸っぱいモノ：０５（後書き）

次回も宜しくお願いいたします。

ｂｙ千龍風爽

甘酸っぱいモノ：０６

〈ピンポン〉

日向はある家のチャイムを鳴らす

「はーい。」

と重苦しそうな声

「日向だよ。」

日向が言うと足音近づいてくる

扉が開く

「…空河？」

「えっ？あっ…。」

日向は間違ってしまったらしい

出てきたのは新一、蘭、園子、そして宮野志保
全員？マークを浮かべて日向を見ている
門から全員出てくる

そのとき

「日向、何やってんだよ。場所間違えてるんじゃねーよ！！」

と元気な声が聞こえた
日向は元気な顔になって振り向く

「将季（しょうき）！！」

そう、工藤邸の隣に住んでいるかつ、日向の幼馴染、北村将季
日向が安心して喋れる男の子
そして…

「よぅ、来たか、日向ぁー、待ってたよー。」

そう、久野かなたも幼馴染

「かなちゃん！！」

日向はかなたに抱きつく

そしてもう1人

「あ、たっくん！！」

九嶋拓海、通称　たっくん

蘭たちはそれを唖然としてみてた

「…かなた、日向も来たことだし、じゃあ、皆で行くか！！」

将季が言うとかなたは指を鳴らし、新一らに挨拶し、４人仲良くどこかへ出かけていった

甘酸っぱいモノ：０６（後書き）

短いですが次回も宜しくお願いいたします。

ｂｙ千龍風爽

甘酸っぱいモノ：07

「ねぇ、ドコ行く？やっぱ、カラオケ？」

かなたの意見に皆、賛成
早速カラオケ店へと足を運ぶ

「2時間パックでお願いします。」
将季が言うと皆で店員の後に続いて部屋へと向かった

「うわぁ、久しぶりだな。」

日向は久しぶりに来たのか目を輝かせている

「おーしっ、誰から歌う？…え？何？やっぱり、俺？…だよなぁー、大スターの将季様からだよなぁ…。」

将季はテンションが上がっているのか調子に乗っている
かなたと拓海は「誰もそんなことは言ってない」とキッパリ否定
日向はその様子を見て笑ってた

結局、トップバッターは将季

しかし調子に載りすぎて一気に3曲も歌ってしまい、帰る頃には喉

がガラガラになりそうだったという（↑後日談）

日向は　Ｓｅｃｒｅｔ　ｏｆ　ｍｙ　ｈｅａｒｔ　を歌い、かなたは　Ｔｈａｎｋ　ｙｏｕ　ｆｏｒ　ｅｖｅｒｙｔｈｉｎｇ　を歌った

拓海は元々、大人しく、歌もあまり歌わないため、皆の歌う姿を見ていた

時間はあっという間に過ぎていった

「ねぇ、最後に記念にさ、皆でプリクラとって行こうよ！！」

日向の意見に皆、賛成し、近くのデパート内にあるゲームセンターへと足を運んだ

［じゃあ、撮るよー、３・２・１…］

機会の声が消えたと同時にシャッター音が鳴る
拓海は微妙に控えめ、将季とかなたはセンターを取り合い、結局、
大人しく準備をしていた日向がセンターに

そして撮り終えると今度は皆で落書き

かなたは落書き＝デコレーションが大好きなため、デコレーション
のことになると暴走。
デコレーションはほぼかなたが手掛けた

４等分にして、配る

日向はそれを見て思っていた

（やっぱり皆といるときが本物の…心からの笑顔でいられるな）

と。

そしてその後は皆でブラブラ。

とまたもや…

「あれ～、空河さんじゃなぁい。お友達と一緒に何して…あー、将季君に拓海君も一緒…。」

日向を苛めている女子ぐんとばったり出会ってしまった

将季と拓海は性格や顔等からして女子に結構人気がある。

新一と同じくらいのレベル、日向は誤解を招くと思い、将季や拓海と幼馴染ということを話してなかった

当然、女子は怒りが積もる

とまたもやそのとき…

「あれ、ひなちゃん。」

蘭の声がした

日向たちは振り向くと蘭、新一、園子、志保の４人がいた

女子らは新一にも反応

「キャー、新一君ーっ。」

女子は日向を睨んだ

そしてツカツカと日向の前へとやってくる

日向は女子らの視線に恐れ、かなたの服の裾を強く握った

「ちょっと、アンタら、日向に何すんだよ！！」

かなたは日向を守る

「はぁ？アンタには関係ないでしょ！？アタシら、空河さんに用事があるのぉ。分かったらどいてくれない？

邪魔なんだよね。」

紗沙も負けずに反発

「将季、たっくん、行くよ！！」

かなたがいうと将季と拓海は頷き、その場を素早く走り去った

「…日向、大丈夫？」

かなたは日向の背をさする

日向は小さく頷いて「かなちゃん、有難う。ゴメン。」と小さな笑顔でお礼をいい、謝った

将季と拓海も女子群から逃げられ一息ついている

「もう、またアイツらと鉢合わせするかもしれないからもう出よう。」

かなたが言うと日向は頷き、４人は出た

「ねー、今日、将季の家に泊まってくわぁ。いいでしょ？着替えは後で持ってくるからさ。」

かなたが言うと将季は少し考えＯＫした
当然、かなたが泊まるとなると日向、拓海も泊まることになる
日向はその夜、将季の家内の部屋でかなたと同じ部屋に寝た

「ねぇ、かなちゃん…起きてる？」

日向は布団から起き上がり聞いた

「…ん？起きてるよ。どうした？」
かなたは向きを日向がいるほうへと変えた
「私、工藤君に恋したって前いったでしょ？」
と日向。かなたはうんと頷く
「でも、何かもう、自分が分からなくなっちゃったんだ、私は誰に恋をしてるのか、私は本当に工藤君が好きなのか…。
わからないんだ…。だって、何か自分では工藤君に恋してるって思ってるのにさ、今日、将季に目が向いてるんだもん。」
日向は段々と涙声になっていった
かなたは起き上がり、日向の頭を撫でた
「やっぱり、何か恋愛って言うか恋ってわかんないよね。…ねぇ、日向、試してみたら？
自分の心を正気に戻してみたら？」
とかなた、日向は目を丸くする
「工藤君に告白するの。」

「…えぇっ？告白…！？」

「そう、もしも…悪いほうに例えちゃうけど工藤君に告白して振られても別にどーでもいいやーって思ったら工藤君への気持ちが薄れてる証拠。

ショックが大きかったらアンタが本当に工藤君に恋してたってコト。」

かなたが提案。日向は「それ、いいかも知れない。」と提案に賛成し、作戦会議が始まった…と思いきや…

「おー、女子は恋の話で盛り上がってんのか！？誰々？誰好きなんだよ？」

と将季と拓海がやってきた

かなたは呆れ、結局、作戦は立てずじまいになってしまった

甘酸っぱいモノ：０７（後書き）

次回も宜しくお願いいたします。
感想等もお待ちしております。
では。

ｂｙ千龍風爽

甘酸っぱいモノ：０８

「ふぁぁぁ～、かなちゃん、おはよ～。」

日向が目覚めるともう既にかなたは起きていた
かなたはもう着替えて、髪を整えており、日向も急いで着替え、髪を整えた

そして将季と拓海の寝ている部屋へと２人で向かった
かなたが部屋の前に来て扉をノックする

「あんた達、起きてんの？今、８：２０！！」

力強く言うかなた
扉越しから

「起きてる起きてる、今、着替えてんだから覗くなよ！」

と元気でだが少し眠たそうな将季の声が聞こえた

「「そんなの覗くかバカっ！！」」

かなたと日向で声を合わせ言うと2人は少し怒ったような雰囲気で

1回へと降りていった

1階に着くと、そこには4人分の朝食が並べられていた

[将季・拓海君・かなたちゃん・日向ちゃんへ

お早う、昨夜は良く眠れましたか？私は仕事のため帰ってくるのは今日も夜遅くなりそうです。
戸締りしっかりお願いね。朝食、冷めてるのが嫌だったらチンして暖めて食べてね。
P．S　今日、一応、新君の家に顔を出しておいてね。家で作った野菜のおすそ分けって意味でね。」

というメモ紙も置いてあった
恐らく、将季の母親が書き残しておいたものだろう
日向は新君という人が誰なのかはすぐに分かった
勿論、かなたもすぐに分かった
とそのとき、将季と拓海が降りてきた

「お、今日、目玉焼き、早速食おーぜ！！」
将季がいうと日向とかなた、そして拓海は席について朝食を食べ始めた

「ねぇ、将季、新君ってさぁ…」
日向が聞いた

「あ？新？工藤新一。」

将季は目玉焼きをほおばりながら答えた
かなたは「やっぱりそーか…」と呟くように言った

「将季、何か新一の家行って、野菜分けろって書いてるよ。」

と拓海がメモ紙を見ながら言う、将季はメモ紙を手にとって「めんどくせーな」と呟く
しかし将季の母親は怒ると怖いと幼馴染の中でも有名だったため、渋々、将季は野菜を持って隣の工藤邸へと向かった

日向、かなた、拓海も一緒に向かった

「しーん！！いるかーっ？」

将季は野菜を持ち、インターホンを鳴らす
新一はすぐに友達と共に出てきた

そう、友達というのはいつものメンバー、新一、蘭、園子、志保

「将季、どーしたんだ？」

と新一は門を開け、皆を中に入れながら聞いた

「いやさ、うちの母さんが野菜できたから新の家まで持ってけってさぁ、ほい、これ、きゅうり、トマト、あとその他諸々。」

将季が新一に野菜の入った袋を渡す

「いつも悪いな。」

と新一

「いや、うちの母さんが勝手にやってるだけだから。」

将季は苦笑しながら言う

日向はその様子を見て、小さく微笑んでいたがすぐに顔は普通の顔、いや、少し悲しい顔になっていたのだろう…

蘭が新一の元に来て、しかも腕を組んで新一が貰った野菜を覗いていたのだから

かなたは日向を庇った

「日向、大丈夫？」

とかなた、蘭はその言葉に反応し、日向の前へと駆け寄った

「ひなちゃん、具合悪いの？大丈夫？」

蘭は心配そうに聞いた

そして蘭は体温を測ろうと、日向の額に手を当てようとしたが…

「いやっ、触らないでっ！！」

「！！…っ」

日向は蘭の手をはたいた
かなたも流石に目を丸くした
新一と園子は蘭の元へと駆け寄る

「ちょっと、蘭に何するのよ！！蘭、大丈夫？」

日向に怒りの目を向ける園子
日向は我に返ったのか「御免なさい」と何回も繰り返し謝る
かなたは日向を庇った

「大丈夫、日向。…日向は悪くない、すべて悪いのは…蘭、貴女のせいだから！！」

かなたは蘭を指差していったあと、日向を連れて、将季の家へと去っていってしまった

甘酸っぱいモノ：０８（後書き）

次回も宜しくお願いいたします。
感想等もいつもでお待ちしております。

ｂｙ千龍風爽

甘酸っぱいモノ：０９（前書き）

園子は隣のクラスという設定にしておいてください、隣のクラスでもかなたとは別のクラスです。

甘酸っぱいモノ：09

「かなちゃん、何か今日、色々、ゴメンね。」

日向はかなたに謝る

あの1件から日向はすっかり気持ちが沈み何もする気が起きなかった

将季や拓海もかなたがワケをすべて話し、納得したりしなかったりの繰り返し

「元気出せ！」と将季が言ってくれたが元気というものはすぐに出てくるものではなかった

「明日、学校行っても頑張り！何かあったら相談乗るから！それに将季とたっくんもいるでしょ？」

とかなた。日向は小さく微笑み小さく頷いた

うんうんとかなたは頷くと日向を思い切り撫で、「じゃあ、私コッチだから」といい、別れた

日向は「ばいばい」と小さく手を振り、暫く見送ると再び家に向かって歩き出した

～NEXT　DAY～

「…お早う。」

日向はしてもしなくても変わらない挨拶をして教室へと入る
席に着くと隣には新一と蘭、そして隣のクラスから遊びに来ている
園子がいた

蘭は「お早う」と元気よく挨拶、しかし園子は日向を睨んでいる
新一は苦笑しながらずっとその場にいた

「これからＨＲを始めるがその前に転校生だ。入れ。」
担任の指示で入ってきた転校生

「宮野志保です、宜しくお願いします。」

志保が転校生として入ってきた
と同時に

「先生、事件なんで一旦失礼します。」
と新一が携帯電話を握り締め、手を上げた
担任は「いってこい」といい、新一は教室を後にした
志保は新一を見つめると再び、クラスメートへと目を戻した

「宮野の席は、空河の隣が空いてるな。１番後ろで窓側だけど大丈夫か？工藤と親しいみたいだから空河と席、交換してもらうか？」

気を使う担任に志保は「お気遣いなく。」といい、日向を見つけ、自分の席へと向かった

「…宜しくね。」

志保が言うと日向は「よ・宜しくお願いします。」と少し下を向いていった

休み時間になると日向は志保・蘭から離れたいためか、かなたのいるクラスへ向かった

蘭が呼び止めようとしたが日向は蘭の手をはたいてしまったことを背負ってしまったのか蘭の声を聞かぬふりをして出て行ってしまった

〜昼食時間〜

「…かなちゃん…。私ね、工藤君に告白するの、止めようと思う…。」

日向は今、かなたと一緒に屋上にいる
かなたは、飲んでいたお茶を吹いた
むせるかなた
「あ、ゴメンね、かなちゃん、大丈夫？」
日向は慌ててかなたの背をさする
「大丈夫大丈夫、気にしないで…、って何で止めちゃうの？」
かなたは日向に聞いた
「…蘭ちゃんに…敵わないような気がしたんだ。それに工藤君は蘭ちゃんが好きだと思うし…。」
「え？工藤君に聞いたの？」
とかなた
日向はううんと首を横に振る

「じゃあ、やってみなよ、わかんないじゃん。」

とかなた

「もう私そんな勇気ないよ。だって…蘭ちゃんを叩いちゃったもん。工藤君がもしも蘭ちゃんを好きなら絶対、私を軽蔑してるよ。」

日向は屋上の手すりに身を乗せ、悲しい目をしていった

かなたも手すりに身を乗せる

「…ま、アタシは口出ししないけど、後悔はしないほうがいいよ。」

かなたがいうと日向は目を丸くし、そしてすぐに目を細めて頷いた

「あぁーっ、吹っ切れた。…ような気がする。」

「何じゃそりゃ。」

「「ハハハっ」」

2人で笑いあっていた

「ハハハ……ハっ…うっ…。」

日向は段々、笑いながら泣きに入ってくる
かなたは日向を撫でた

とそのとき…

「もう、新一ったら…、園子、志保さん、今の新一の発言、どう思う？」

タイミングが悪くも、蘭・園子・志保・新一がやってきた
かなたは眉を引きつらせた

日向は胸が苦しくなる

「あー、ひなちゃん、かなたちゃん！！」

蘭が遠くから手を振り、駆け寄ってきた

「…ひなちゃん？泣いてるの？どうしたの？大丈夫？」

蘭が聞く

かなたは日向に「大丈夫だから」と安心させると、蘭を鋭い目つきで睨む

蘭は1歩身を引いた

「蘭、貴女のせいよ。蘭のせいで日向はこんな苦しい思いしてんの。理解できる！？」

かなたは力強く蘭を指差して言った

日向は涙でぬれた顔を上げた

園子と志保、新一が到着

「…わたしの…せい？」

蘭は理解しきれない

「そうだよ、蘭のせいだよっ！」

とかなた

その言葉が耳に入った園子は思い切り反発

「何でそこで蘭が出てくるのよ！？自分の気持ちもろくに喋れないのが悪いんじゃない！！」

「何ですってぇっ！？日向は好きでこうなってるわけじゃないの！！ってか部外者が口出しすることじゃないでしょう！？
分かったらさっさと黙って！！」

かなたと園子の間でまた1つ新しい口喧嘩が始まった

「それじゃあ、貴女だって部外者でしょう！？私は蘭の親友としていってるの！！」

「私だって同じよ！！」

バチバチと雷が…
志保は呆れてみている
日向はとめるにもオーラが怖くてとめられない

「はいはい、わかったから。」

志保が手をパンパンと叩くと途端に口喧嘩が終わった
日向も少しホッとしている

「そうそう、空河さん、貴女、工藤君を狙ってるつもりでしょうけど、もう彼は予約済＝売約済みよ。」

園子が言うと日向は頭の中が真っ白になった
予想が的中したのもあったが、1番の大きな傷(ショック)は、自分でそれを確かめられなかったこと。
日向は目を涙をため、園子を突き飛ばして、屋上を後にした
かなたは園子に
「アンタって本当にサイテー、人の気持ちを考えてないバカだわ！」
と、怒り、園子の頬をはたいて、蘭と園子を突き飛ばして日向を追った

甘酸っぱいモノ：０９（後書き）

次回も宜しくお願いいたします。

ｂｙ千龍風爽

甘酸っぱいモノ：１０

日向はその日、教室には戻ってこなかった
蘭は日向の席を見て、暗い顔をする

「…蘭、気にすることないよっ！！」

園子は蘭を励ますが、蘭の気持ちは上がらない

かなたは蘭と園子と会っても怖い顔をするだけ、結局、何もならなかった

日向は気分晴らしに将季の家の前に来ていた

将季は日向に氷の入って冷たい飲み物を出す

「んで、マジで止めちまうのか？新に告んの。」

と将季

日向は小さくコクンと頷く

将季は「ふーん」というと一気に冷たい飲み物を飲み干した

「ま、オメーがいいならいいんじゃね？」

と将季

日向は頷くことしか出来なかった

「…なぁ、もしも…もしも、仮にさ、かっ、確定したわけじゃねーけど、新に告って振られても、お・落ち込むなよっ、俺がいるからなっ／／／」

赤面していう将季に、日向も赤面し「えっ？」と聞き返す

「だーかーら、俺らがついてるってコトだよ、かなたとか拓海とかな！！」

日向は目を丸くして将季を見ると「有難う、将季！」と笑顔でお礼

を言った
うんうんと将季が腕を組んで頷いた

「うん、ホントに元気出たよ！！やっぱり将季といると元気出るなぁ…。」

日向がいつもの笑顔になると将季もいつもの笑顔になり

「そーれがいつもの日向だよな～。」

といった
そのとき…

「おっじゃまーっ！」

とかなたの声が聞こえ、リビングに拓海をつれて来た
将季は拓海をみて目を点にする

「…オメーら、付き合い始めたのか？仲良しさんみたいに腕まで組んじまってよ。」

と将季
かなたは将季の元に来てバンバンと将季の背中を叩いて「バッカねー！！んなわけないでしょーがっ！」と笑いながらも怒ってるように言う
将季は苦笑しながら叩かれて、叩かれるのを止めるとすぐさま、自

分の背中を頑張ってさすった

「ねぇ、将季、日向のこと全部聞いたんでしょ？」

とかなた

「あー、一応な。」

と将季

かなたはそれを聞くとニマリと笑い、将季の耳元で囁くように言った

「残念だったね～、ひそかに狙ってたんでしょ？日向を！」

将季は思い切り、赤面し、「んなんじゃねーよっ、ばっ、バカなこと言わせんなよな！！」と怒る

かなたはげらげらと笑い始めるわ、日向は熱でもあるんではないかと思い心配するし、拓海は挙句の果てに団扇を持ってきて将季を仰ぐ

そしてエアコンもつけ始めた

甘酸っぱいモノ：１０（後書き）

次回も宜しくお願いいたします。

ｂｙ千龍風爽

甘酸っぱいモノ：１１（前書き）

「宮」というのは将季が志保につけたあだ名です。

甘酸っぱいモノ：１１

「…宮野さん。」

偶然会ったのは志保

将季の家に寄ったときに丁度、会ってしまった

「…最近、よく会うわね。幼馴染に会いにでも来たの？」

志保は小さく微笑んで聞いた

「…別に、そんなんじゃないです。というよりも貴女には関係ないです、では失礼します。」

キッパリ言うと日向は志保に頭を下げ、早足でその場を去っていった

志保は小さく微笑みながら日向の後姿を見送ると、今度は将季の家を見上げた

とそのとき…

「なぁなぁ、宮、今、日向いたような気がすんだけどいたか？」

将季が出てきた
志保に聞く

「私の名字は”宮”ではないわ。”宮野”なんだけど。で、空河さん？えぇ、確かにいたわよ。
何か私が聞くと頬を少し赤らめて帰っていったけど、貴方達、恋人同士にでもなったの？」

と志保
将季は少し頬を赤らめて「んなワケねぇだろ！」と答え「じゃ、じゃーなっ。」というと、そそくさと家の中へと入ってしまった

志保は「工藤君と蘭さんみたいで素直じゃないのね。あの2人も。」と呟くと阿笠邸へと入っていった

「…はぁ。」

溜め息をつきながら街中を歩いている

「あら、日向ちゃんじゃないの、久しぶりねぇ。」

突然、声がした、日向は声のしたほうをむく

「里穂先生。」

日向の保育園時代の先生、石山里穂、なぜか、年少から年長までずっと担当してくれた日向が1番大好きな保育士

日向はみるみるうちに笑顔になり、里穂の前へと向かった

「今日はどうしたんですか?」

と日向

「今日はたまたまお休みを貰ってねぇ。久しぶりにブラブラしてたの。…ん？どうしたの？」

日向の顔を覗き込む里穂

日向は慌てて「えっ？何が…ですか？」と聞く

「何か、元気なさそうだし、顔が暗いから悩み事でもあるのかなって。…大丈夫？」

と里穂

日向は里穂にずべて話そうと思い、近くの喫茶店へと入っていった

「へぇ…そうだったんだ。」

里穂は珈琲を一口飲む
日向は「はい」と頷く

「まぁ、恋愛っていうか片思いっていうか、特に初恋は甘酸っぱいからねぇ。」

「甘酸っぱい？ですか…？」

聞き返す日向

「あら、日向ちゃん、良く聞かない？特にお祖母ちゃんとかから昔は初恋はレモンのように甘酸っぱいって言われたのよ。」

と里穂
日向は初めて聞いたように「へぇ～。」と納得

「でも、気持ちはちゃんと伝えなきゃ駄目よ。いくら好きな人に彼女がいるからって言っても、自分の気持ちを伝えなきゃ、後で後悔するのは日向ちゃん自身よ？もっと自信を持って！！」

里穂がいうと日向はうんと頷くことしか出来なかった

甘酸っぱいモノ：１１（後書き）

途中半端で御免なさい。次回も宜しくお願いいたします。

ｂｙ千龍風爽

甘酸っぱいモノ：12

「はぁ…。」

日向は1人教室で溜め息をついていた
そして鞄から1つの手帳を取り出した、と同時に

「あっ…。」

手帳を落としてしまった
慌てて拾おうとするが…

「ちょっと、何これ、空河、どういうコト！？ちゃんと説明しなさいよ！！」

紗沙達がやってきた
そう、日向が落としたのは遊びに行ったときに撮ったプリクラがはってある手帳

「うーわっ、アンタ、生意気！！」

プリクラには　ずっ友　や　いっつもいっちょ☆　バカなじみ　といったデコレーション文字がたくさん

女子は当然怒る

「返してっ！！」

日向は立ち上がり、紗沙が奪い取った手帳を取り返そうとするが、もう何人かの女子生徒に押さえつけられた

蘭が何とか日向を守ったおかげで何とかなった

しかしその次の日、日向は風邪で休んだ

日向は自分の部屋のベッドで寝ていた

そのときインターホンがなった

日向はふらつきながらも玄関へと向かう

「…かなちゃん？…将季、たっくん。」

お見舞いに来たのは幼馴染の３人、かなた、将季、拓海

そして…

「ひーなちゃん♪」

蘭、志保、園子、なぜか新一だった

「皆、来て…くれた…ん…ゴホっゴホ…」

むせる日向

「日向、大丈夫!?…ちょっ、熱上がってるじゃん!!」

日向は小さく笑うと、熱のためか、もたれかかるように、倒れた、

…新一に…

園子は目を丸くする

それは将季も同じだった

「日向!?大丈夫!?」

かなたは必死に日向に呼びかける

「…熱なのに無理して気を失ったみたい、とりあえず、命には別状なし。」

と志保

新一は少し戸惑いながらもかなたに日向の部屋を聞き、日向を運んだ

園子は怒りを燃やし、蘭は悲しい瞳をしていた

「…新一、私とひなちゃん、どっちが大事なの？」

と蘭はただ呟くしかなかった

甘酸っぱいモノ：１２（後書き）

短いですが次回も宜しくです。

ｂｙ千龍風爽

甘酸っぱいモノ：13

日向はベッドで穏やかな顔をして寝ていた
かなた、将季、拓海は傍についていた
しかし蘭たちも心配といい、結局、日向の傍についていた

「やっぱ、昨日から少し顔色は良くないって思ってたけど。」

とかなた

「ってかかなた、昨日、日向と会ったのか？」

将季が驚いたように聞いた
かなたは普通にうんと頷く

「女子同士で会っちゃ駄目なわけ？ちょっと、日向のご相談に乗ってたの！」

かなたは蘭を睨みながら言った
園子はそこでまた怒りが爆発

「ちょっと、久野さん、貴女、何でいちいち蘭を睨んで物事を言うのよ！？蘭は悪くないわよ！！
蘭、気にすることないから。」
と園子

「はぁ！？蘭のせいで日向は苦しい思いをしてんだよ！？蘭が悪いに決まってんじゃん！！」
とかなた
口喧嘩はどんどん激しく

「口喧嘩は外でお願いするわ。一応、病院じゃなくてもココは一応風邪を引いた病人の部屋なんだから。」

志保が言うと2人は黙った

「ねぇ、今日はもう帰ってくれない？ついてるのは幼馴染で充分。」

かなたがいうと蘭は「ひなちゃんにお大事にって伝えておいて」といい、新一と園子、志保と共に帰っていった

「そうだっ、将季、アンタ、お粥作りなさいよ！！料理得意でしょ！？」

かなたが手を叩いて将季にいった

将季は少し迷ったが

「よーしっ、将季様の出番か！！おい、拓海、手伝え！！」

将季は拓海を指差す

「俺、料理できないよ。」

と拓海

「いーんだよ、手伝いなんだから！！メインシェフはこの俺、将季様なんだから！！」

将季はバンと拓海の背中を叩いていった

拓海は背をさすりながらも将季についていった

「…ひーなた、起きてるんでしょ？工藤君がいるときも！！」

かなたが目を瞑りながら見過ごしたように言うと、日向はうっすらと目を覚ました

そして微笑

「よく分かったね。」

とひなた

「当たり前、何年間一緒にいると思ってんの？それにアンタ昔から寝る真似だけは下手だったし。」

かなたは白い歯を見せて笑った
日向も小さく笑った

「あのね、かなちゃん、私、昨日、里穂先生と久しぶりに会ったんだ。」

と日向
かなたはほぉと目を丸くする

「えっ！！私も会いたかったなぁ…。先生、どうだった？元気にしてそうだった？」

かなたは日向に顔を近づけて聞いた
日向はうんと頷く

そして体温計を脇に挟み、体温を測る

体温は３７・５。

「微熱だね。ま、もうちょっと寝たら下がるんじゃない？」

かなたは体温計をみながら言った
日向は小さく頷こうとした、そのとき…

「日向ー起きろーっ！シェフ将季様と手伝い、拓海が作った特製お粥が出来たぞーっ！！」

将季が大きい声でお粥を持って入ってきた
かなたと日向は声の大きさに目を点にしているが、日向はすぐに笑顔になり、お礼をいって、将季と拓海が作った特製お粥を笑顔で美味しそうに食べていた

そしてまた少し寝て、再び目を覚まし、体温を測ると熱は３７・０ちょっきりまで下がっていた

「…あ、熱、下がった。」

と日向
将季は目を丸くし

「俺様が作った特製お粥のおかげだな！」

と喜んだ
しかしその後、将季に日向の風邪が移ってしまい、何日か将季は寝込んだという

甘酸っぱいモノ：１３（後書き）

次回もお願いします。感想等もお待ちしております。

ｂｙ千龍風爽

甘酸っぱいモノ：１４

「…よしっ！」

日向は自分の部屋で気合を入れて何かを始めた

～次の日～

「おっはよー、日向ー！」

かなたは日向の肩を組んで元気よく挨拶
日向も笑顔で「おはよう」と返す
将季と拓海の家へよって、お迎え
拓海は眠そうな顔をして出てきた
そして今度は将季の家へ。

「しょーき、迎えに来たよー。」

と日向
しかし…

「日向、間違ってる。」

と拓海、そう日向はまたもや、工藤邸に呼びかけてしまった
日向は工藤邸の門にお辞儀をし、将季の家へと向かう

そして再び将季を呼ぶ

将季はなかなか出てこない

「悪(わり)い！！今まで便所にこもってたんだ！！」

やっと将季が出てきた

そして行こうと思ったら、工藤邸を出てきた蘭たちと鉢合わせ

将季は「あちゃー」と小さく呟くような体制に

かなたは日向の前へと出てくる

拓海は特に何もせず、様子をぼやーっと見ている

日向は新一をチラリと見ると避けるように学校へと走っていってしまった

「…はぁ…。やっぱりやめようかな…。」

溜め息をつく日向

そのとき、蘭、新一、志保が入ってきた

「ぁっ…。」

日向は目を丸くし、教室を後にした

「ひなちゃん！！」

蘭は日向の後を追った

日向は走って、屋上まで来ていた

「ひなちゃん！！」

蘭は日向の名を呼ぶ
日向はおびえるように振り向いた

「ねぇ、何でひなちゃん、私のこと…避けるの？」

蘭は恐る恐る聞いた

「…見てると辛いの。」

と日向

「…辛い？」

聞き返す蘭

「私前言ったよね？工藤君のことが好きになったって。」

蘭は小さく頷いた

「じゃあ何なの？私に仲良しさを見せ付けたいの！？私を苦しめるためにわざと工藤君と腕組んだり、私の前で工藤君と蘭ちゃんにしか分からない話をしてるの！？」

日向は興奮しているのか息が荒かった

蘭は少し黙った

「私はそういうつもりじゃ…。」

と蘭

「じゃ、どういうつもりなの！？…あっ…」

日向は我を忘れていたのかは知らないが、我に返ったような顔をして蘭を見つめた

「…ゴメンね、何か私、バカなこと言ってた。ゴメンね…。こんなのってただの僻みだよね。

別に工藤君と蘭ちゃんが一緒にいるのを見てひがんでるだけだよね。

でも私、工藤君が好きなの、もう諦められないの！！」

蘭は心に日向の言葉が突き刺さったようだった

「…ううん、悪いのは私だから。そうだよね、ひなちゃんだって新一のコト好きだったものね。

私も正直言って新一のことは昔っからだーい好きで…。…どうしようもないってくらい…大好きで…」

蘭は泣いてしまった

日向はどうしていいのか分からず、ただ蘭の泣いている姿を見ているしかなかった

「…ひなちゃん、私、新一、諦めるよ。ひなちゃんに、新一、譲る。私は私で自分のシアワセを見つけるから。
ひなちゃん、新一とシアワセになってね。」

蘭はそういい残すと、涙を拭いもせず、その場を去った

日向はただ、追いかけることも出来ず、蘭の去って言ったところを見つめることしか出来なかった

甘酸っぱいモノ：１４（後書き）

次回も宜しくお願いいたします。因みに最初の部分で出てきたところは今回はあまり触れませんでしたが、最終回に近づくに連れて役立ちますので。

ｂｙ千龍風爽

甘酸っぱいモノ：15

「…あんなことというなら…した意味…なかったよ…。」

日向は蘭のいなくなった屋上で1人呟いた

日向は段々涙目になっていき、仕舞いには1人静かに泣いてしまった

「…はぁ。」

日向は教室で1人溜め息をついた
蘭は志保の席に新一と共に遊びに来ていた
蘭は日向の様子を伺うように日向を見た

「蘭さん？どうかしたの？」

志保が様子を伺うように聞く

「ううん！別に…別になんでもないよっ！」

蘭は心配かけさせまいといつもどおりに振舞う
しかし新一は日向と蘭の間に何かがあったのだと思った

新一は一旦、志保たちの机から離れて、日向の机へとやってきた

日向は新一を見た

「空河、放課後に話しがある。」

新一はそれだけ言うと志保たちの机へと戻って行った

日向は鳥肌が立った

日向はいっそのこと、帰ってしまおうかとも思った

日向はその日の休み時間、かなたの教室へと向かった

「…何だってーっ！？日向、マジで蘭にいったのーっ！？」

「しっ、かなちゃん、声が大きいよ。」

人差し指を口元に当てていう日向
かなたは慌てて口を手で塞ぐ

「で、アンタ、マジで蘭にあんなこと言っちゃったの！？」

とかなた
日向はゆっくりと頷く

「で、何か、それが工藤君にばれちゃったのかは分からないけど、放課後話があるって呼び出されちゃって…。」

と日向

「…あー、マジか。ちょっときついかも知れんよ。」

かなたはあちゃーといいながら考えるようにいった
俯く日向

「でも…いいの、悪いのは全部、ぜぇーんぶ私だから。私が工藤君

に恋心なんて抱かなければこんな事態にまではなってしなかったはずだし。」

悲しそうな微笑をしていう日向

「日向、いい加減、自分を責めるのやめなよ。日向だけが悪いわけじゃないんだからさ。」

かなたは真面目な顔をして日向に言った

日向は少し黙ってから小さく頷いた

日向はかなたに「いつも有難う。」とお礼を言って、屋上を後にした

かなたは日向の後姿をみて「がんばっ！」と呟くしかなかった

「…新一、帰ろうよ！！」

蘭が新一を呼ぶ

新一は「わりっ、今日、俺、用事あるから、先帰ってくれ！！」と謝って蘭たちを見送った

日向は掃除を済ませると教室へと戻った

「…御免なさい、少し待ったでしょ？」

と日向

「別に大丈夫。で、空河、蘭と何があったんだ？」

日向は小さく俯く
やっぱり自分がすべて悪いんだ…
その気持ちと思いしか頭の中を回らない
話す言葉なんて一語も思いつかない

「…御免なさい…。御免なさい。」

日向は段々、涙ぐんで謝ることしか出来なかった
新一は突然の日向の行動に驚くことしか出来ない

「お、おい、顔上げろよ…。」

しかし新一が言っても日向はずっと謝り続け、顔を上げることはなかった
やっと日向が顔を上げたのは夕焼けが綺麗に輝いた頃だった

「工藤君…。これ、受け取って。」

日向はスクールバッグから1枚の紙を出して、新一に押し付けるように渡すと、走って教室を後にした

甘酸っぱいモノ：１５（後書き）

そうです、日向がしたこととは…次回で明らかになります。
次回も宜しくお願いいたします。

ｂｙ千龍風爽

甘酸っぱいモノ：16

新一は家に帰り、日向から貰った手紙を見ようとした…
が…

「新一っ、お夕飯まだでしょ？つくりに来たよ！！」

「試食しにきましたぁ～。」

「誘われたから来た。」

蘭、園子、志保が来てしまった
新一は慌てて手紙を後ろに隠す

「お・おー、悪ぃ！」

少し焦りながらも冷静さを保とうとしている新一
志保は新一の顔色を伺う

「…何隠してるの？」

少し眠そうに言う志保
新一は「はっ？」と驚く。園子は新一の焦りようを観察しているような目を向ける
蘭は少し心配そうな顔で新一を見つめる

「…隙あり。」

志保は新一の隙を見て、新一の後ろに回りこんだ

「ちょっ…。」

新一は手紙を奪われた

「何よ、これ！？」

園子は志保の持っている手紙を横から覗き込み、怒っているように驚いた
蘭は顔が曇る

「らっ、蘭、誤解すんなよ！！それは、恋文…じゃねーから。」

新一は誤解をするなというような身振り手振りで蘭を安心させよう

とするが…

「新一、いいよ、気を使ってくれなくて…。ゴメン、今日、お夕飯作ったらすぐに帰るから。」

蘭は寂しそうに言うと、靴を脱いで台所へと向かう
そして言ったとおり夕飯を作るとそそくさと帰っていってしまった
光る涙を流しながら

「ねぇ工藤君、これって、空河日向っていう子からよね？」

蘭がいなくなった静かな空気の中園子が口を開いて新一に尋ねる
新一は「あぁ」と小さく頷く

「まだ空河さんと関わってたの！？」

と園子

「関わってたって…ただ席が隣だっただけだって。」

新一は苦笑しながら言う
園子はジト目で新一を睨みながら疑う

「ま、彼の言ってることは本当だけどね。」
横で志保が証言
「志保さんが言うなら信用するわ。」
園子は腕を組みながら言った
「…俺、信用されてねーの？」
と新一
園子は「当然よ」というような態度を新一へと向ける
「何か蘭とトラブルあったぽかったから話を聞こうとしただけだよ。
そしたら空河、謝っただけで、代わりに手紙をくれたんだ。」
新一は赫々云々と説明
園子は一瞬、新一を疑うような眼で見た
「開けてもいいかしら？」
と志保と園子
「やめとけって。女って怖いんだから。」

と新一
志保は「じゃあ、はい。」といいい、新一に手紙を私、園子を連れて帰っていった
新一は日向から受け取った手紙を少しだけ見つめると封筒を開けて、中身を取り出した

甘酸っぱいモノ：１６（後書き）

次回も宜しくお願いいたします。

ｂｙ千龍風爽

甘酸っぱいモノ：17

「えー…何々…。」

新一は手紙を開いた

「工藤新一様

何か堅苦しい感じだけど気にしないでね。
何か手紙で言うのは古いような感じだけど、言わせてね？

…好きです。

ハハハ…何か変だよね、手紙の中で告白なんて…。でもね、本当に大好きだったんだ。
今、見たとき思ったでしょ？何で直接告白しないのかなって…あのね、分かってたの、

工藤君が蘭ちゃんのコトが大好きだって。分かってたの。だから口で直接伝えても意味がないと思った。

私は私でまた新しい恋を探します。何か宣言みたいで変だよね。
あのね、私、告白してもいい？別のこと…

私ね、下手したら死んじゃうかもしれないんだ。」

「…死ぬーっ？」

新一は叫んだ
それは、隣の阿笠邸、北村邸にも木魂した

「…ねぇ、工藤君、今の声は何？死ぬって木魂してたけど…。」

志保がやってきた
新一は日向の手紙を見せた

そしてついには…

「しーん、何かあったのかー？」

と将季までやってきた

「…おい、将季、空河の幼馴染なんだろ？手紙に死ぬって書いてあったけど何かあったのか？」

新一は手紙を指差して聞いた
将季は少し顔が曇る

「日向は小さい頃から心臓が弱くてよ、何回か手術（オペ）してよくなったのによ、この前病気が再発してさ、もう手の施しようがないって言われてさ。このことは幼馴染しか知らないんだ。」

と将季

「親、いねーの？」

新一は聞いた

「中３の時に事故で両親亡くしてんだ。
日向さ、宣告受けたとき凄く絶望した顔してたんだ。当たり前だけどな。
だから今までやりたくても出来ないことを我慢しないでやってきたんだ。
多分、恋だってそうだと思う。」

と将季
志保と新一は目を丸くした

「ねぇ、北村君、空河さんは今、どこにいるの？」
と志保
将季は「まだ自分の家」と答える

「ねぇ、工藤君、蘭さんに教えたほうがいいわよ。これから行きましょ？蘭さんの家。」
志保が言うと新一は頷いた
そして毛利探偵事務所へ…

「…嘘…。」

蘭は驚いて聞き返した
将季は何もいえなかった

新一は少し黙っていった

「空河の家、行くか。」

と…

甘酸っぱいモノ：17（後書き）

話が捻じ曲がってるような気が（汗

次回も見てください。

ｂｙ千龍風爽

甘酸っぱいモノ：18

「お母さん、あのね、今までずっと言ってなかったんだけど、私、
また心臓の病気再発しちゃってたんだって。
でね、手遅れで、手の施しようもないんだって…。だから、もう
少しでまたお母さん達に会えるんだ。」

日向は両親の仏壇の前で1人呟いていた
そして手を合わせる

日向は仏壇の前から立ち上がり、家の中をブラブラ。

「ひーなたっ♪」

かなたがやってきた。

ひなたは玄関へと向かう

「かなちゃん、いらっしゃい！」

ひなたは玄関でお出迎え
かなたは靴を脱いで、真っ先に日向の部屋へと向かおうとする

「駄目だよ！！…今、すっごく汚いから。」

日向はかなたの腕をつかんで少し恥ずかしそうに言うとかなたはニマリと笑い「それなら尚更見てみたくなる！」というと、日向の弱点でもある擽りをし、日向が手を緩めたところで日向の部屋へと真っ先に向かった

「…信じらんない！！どこが汚いの！？」

かなたは目を丸くして、瞬き。日向が言った汚さとはまた違う。ホコリ１つない。ただ、片付けていない服が２・３着あるだけ。

「日向…、ちょっと、貴女、目がおかしいよ？」

かなたが少し笑いながら言うと日向も笑う

〈ピンポーン〉

「あ、はーい、今出ますーっ。」

日向が言うと、かなたも連れて再び玄関へと向かう

「将季、たっくん…。」

いたのは新一、蘭、志保、将季、拓海の５人

日向は目を丸くする

「悪い、日向…。こいつらに話しちまった。」

謝る将季

「…いいの、元々工藤君に病気のこと告白したの私からだから。だから気にしないで！！」

少し暗い顔で笑いながら言う日向に将季は何もいえなかった

「ひなちゃん、大丈夫!?今、痛くない?苦しくない?」

蘭は心配そうに聞く
日向は小さく頷いて「大丈夫、有難う」とお礼を言う

「ま、とりあえず、上がって。」

日向が言うと、皆、上がる

「小さい頃に…3・4歳だったかな…？とまぁそれくらいのときに1回、心臓に病気があるって知って、手術(オペ)を受けて、完治したって思ってたんだけど…。まだ完治しきってなかったみたいで…。
親が亡くなった後から少し胸が痛くなったり調子がおかしくなって小さい頃からかかりつけの病院にいって調べてもらって…。見てもらったときにはもう手遅れで、余命3年って言われたの。」

「…それって…。」

「うん、今年なの。」

志保が聞くと日向はうんと頷いて言った
蘭は驚きのあまり、目を丸くして驚き手を口の前で覆った

「今はまだ元気だけど、これから先もうすぐ病気の進行が早くなって1人暮らしが苦しくなるって言われて、病院で闘病生活が始まるらしいの。
だから皆とこうやって遊べるのももうないのかな…。」

「…そんな。」

蘭は段々涙目になっていき仕舞いには…

「…ちょっ、蘭ちゃん？」

蘭は日向を抱きしめた

「やだよ…。私、ひなちゃんともっともーっっと今まで以上に仲良くなりたかったのに…。何で？」

蘭はとうとう泣いてしまった

日向は目を丸くして驚いたが

「蘭ちゃん、そんな悲しい顔しないで。私、蘭ちゃんや宮…志保ちゃん、工藤君と出会えて凄く幸せだったの。

だからもう少しでしんじゃうかもしれないって言われても私は今最高に幸せなの。だから何も悔いを残さないで逝けるの。

全部、ここにいる人たちのおかげなんだから…。」

日向は蘭の頭を撫でながら言うと自分も光る涙を流して、皆に礼を言った

とそのとき…

「くぁ…っ…うっ…っはぁ…」

日向が胸を押さえて苦しみだした

「日向！？」

かなたは日向の薬を探しに、そして将季らは１１９番通報。日向は救急車で病院へと運ばれた

甘酸っぱいモノ：19

日向は何とか落ち着き、病室で眠っていた

「病気の進行が思ったよりも早いですね。入院生活がそろそろ始まってもおかしくは…。」

日向の担当医が話している
日向の幼馴染の４人はお礼をいい、日向の病室へと向かった

病室では新一、蘭、志保の３人
蘭は涙ぐんで新一は蘭を慰めている
志保はただ日向の寝顔を見つめていた

「…ん。…びょう…いん？」

日向が目を覚ました、辺りを見回す

「ひなちゃん！！大丈夫！？」

蘭が日向に聞く
日向は目を丸くしてうんと頷く
蘭は日向に抱きついた

「蘭ちゃん…？…工藤君に志保ちゃんも…。あれ？かなたとか将季とかたっくんは？」

日向は辺りを見回しながら聞く

「将季たちなら、医者の話を聞きに言ったぜ。」

と新一
日向は「そう」というだけで、向きを変えて、窓の外から見える景色を見ていた

そのとき、かなたらが戻ってきた

「…かなちゃん、しょーき、たっくん…。」

再び振り向き、かなたたちをみる日向

「ねぇ…どうだった？結構、病気、進行してるって言われたでしょう？」

微笑しながら言う日向

かなたと将季、そして拓海は目を丸くした

「何で知ってたなら病院にいかなかったの！？進行してるって分かってたんでしょ！？」

かなたはとうとう怒り爆発、今でも日向の胸倉をつかみそうな勢い

将季と拓海、そして新一がかなたを抑える

日向は少し目を細める

「御免ね。でも心配かけたくなかった。それにどうせ手の施しようがないって言われてるのに進行してるかもしれないって言って病院行っても少しの処置をするだけで終わっちゃうじゃない。」

と日向

「でもそれでも少し処置しただけでも病気の進行は遅らせることは出来たはず。何でその選択を選ばなかったのよ！？

どれだけ心配するか分かってる！？人事のように言わないで！

ただでさえ、病人なんでしょ！？貴女でしょ？病気にかかってもう少しで死んじゃうかもしれないって人はさ！！」

かなたの怒りは収まらない
怒ったと思えば、目に涙をためて凄い勢いで病室を飛び出していった

将季、蘭はかなたの後を追い、病室には新一、志保、拓海そして勿論のこと日向の４人

「…今のは日向が悪いんじゃない？」
と拓海

「それは自分でも分かってる。御免、たっくん。」
謝る日向

「…皆の分の飲み物買ってくるから。…新、手伝って。」
拓海は少し黙ってからいい、病室を出て行った
新一も出て行った
残ったのは志保、日向

「ねぇ、志保ちゃんがもし私の立場だったら病院に行って少し処置をしてもらって病気の進行を遅らせる？
それとも何もしない？」

日向が沈黙の空気の中口を開いた
志保は少し日向を見つめてこういった

「別に…。それはあなたが決めることじゃない？私がどうこういうことではないわ。
まぁ確信してるのは貴女が後悔しない手段を選べばいいってことよ。」

志保が静かに言うと日向は「そっか」というだけだった

甘酸っぱいモノ：１９（後書き）

次回もお願いします。

ｂｙ千龍風爽

甘酸っぱいモノ：２０

「はぁ…。入院したら入院したでつまらないなぁ…。」

日向はつまらなさそうに呟くとベッドから下り、窓を開け、空気を入れ替える

「あ、高校…。」

日向は窓から見える帝丹高校を見つけ少しだけ目を細める
そのとき

「日向ぁー、来たよっ♪」

かなたが来た
日向は振り向く

「あれ？今日って平日じゃなかった？」

と日向

「今日は平日だけど、今日は帝丹高校の創立記念日学校休み！」

とかなた

日向は思い出したのか手をポンと叩く

更に…

「ひーなちゃん！」

蘭・志保・新一・将季・拓海が来た

「しょーき、たっくん！！」

日向の顔が段々明るくなる

「日向、将季様がお見舞いに来てやった！感謝を…グホっ」

「ま、こういうのは気にしないべき。」

と将季と拓海は普通にコントをしながら病室に入り、日向の元へ行き様子を聞く

「…やっぱり、ひなちゃんたちって、幼馴染なんだね。凄く仲がいい。」

蘭は様子を見ながら小さく笑い言った

新一は蘭を見て小さく微笑んだ

～次の日～帝丹高校

「そーいえばさー、空河って最近学校来てないよねぇ。」

紗沙が呟くように言った
その一言で紗紗の仲間が口々に「不登校じゃねぇ。」とか「まさか、逃げてんじゃないの？」などといった言葉を発する

「…そういえば、アタシ、前にダチの見舞い行ったときに、空河（アイツ）見たよ。何か入院着着てた。」

と紗沙の友達の1人、沙良

「あぁーっ！！そっかぁ…。意味分かったよ。アタシ、空河と同じ幼稚園だったんだけどさ、アイツ、小さいときから心臓悪いらしくてさ…、1回手術して幼稚園何ヶ月か休んだんだよ。」

ともう1人の紗沙の友達、真央

「じゃあ、また…」

「そうだよ、心臓悪くなったんだって！！いい気味よねぇ。このままアイツ、死んでくれないかなぁ…。」

「ちょっと、そんなコトいったら空河さん可哀想だよぉ…。」

「はんっ、別にいいじゃん、だってアイツ、友達いなかったんだからさぁ…。」

「「「「ハハハハーっ」」」」

紗沙はクスクスと笑い、それにつられて他の仲間の女子生徒も笑い出す

「…おいっ！！」

将季が声を張り上げた

紗沙は少しだけ冷や汗をたらし、将季をみた

将季の隣には拓海、新一、志保、蘭がいた

凄い目つきで紗沙を軽蔑しているように睨んでいる

「…北村くぅん…。」

と紗沙

「アイツは…今、頑張ってんだよ！！俺の大切な幼馴染をバカにすんじゃねぇっ！！」

将季は怒鳴るように叫んだ
空気が静まり返る

「将季！？」

隣のクラスにまで聞こえたのか、かなたも走ってきた

「アンタたち…、日向はね、もう治んないって言われてあともう何ヶ月で死んじゃうかもしれないの！！」

かなたの言葉に流石に驚いたのか紗沙も目を丸くする
蘭は日向を思い出してしまったのか、段々涙ぐんでくる

新一と志保が慰めていた

紗沙は新一、将季、拓海を少し悔しそうに見ると、他の女子生徒を連れてどこかへ行ってしまった

甘酸っぱいモノ：２０（後書き）

次回も宜しくお願いします。

ｂｙ千龍風爽

甘酸っぱいモノ：２１

日向は院内を彷徨っていた

ーいつか心臓にかかる負担が重くなって車椅子になるかもしれない。ー

担当医にそう告げられた

その前にずっと歩いていておかなければ…

日向はそう考えた

「今のうちにいっぱーい歩いとかなきゃ。」

呟きながら日向は歩き続けた

「…空河？」

声が聞こえた

日向は振り向いた

「工藤君！！…なんで？いるの？」

日向は新一の前へと少し早歩きで向かう

新一も歩いてきた

恐らく日向の心臓への負担を減らすためだろう

「ちょっと、事件の関係でな…。てか、歩いていいのか？」

と新一

日向はうーんと少し考えた

「多分、大丈夫！！…もう少しで心臓に負担かかっちゃって車椅子になるかもしれないって言われちゃったから。

だから今のうちにいっぱい歩いておこうと思って。」

日向はピースして新一にいった

「…工藤君、そろそろ行くがいいかね？」

後ろから目暮十三警部の声が聞こえた
新一は「今行きます」と返事をしてから日向に「じゃあな」といい、
その場を去ろうとした
しかし…

「工藤君…」

日向に呼び止められた、新一は再び日向を見た…

「……！」

「ばいばい！！」

日向は行き成り、新一の唇にキスをした
そして日向は新一を軽く押して小さく手を振ると、少し早足で病室へと戻った

新一は少し頬を赤くし、日向の後姿を少し見て、自分も目暮の元へと戻った

「…はぁ、とうとうやちゃった…。ただ工藤君を諦め切れなかったから…。ノリでやっちゃったっていうのかな。
もしも工藤君がキスしたことなかったなら工藤君のファーストキスを奪っちゃったってコトなのかなぁ…。」

と1人でブツブツ言いながら再び院内を回っている

自分がやってしまったことはもう取り返しのつかないことになってしまった

日向の目には段々と涙が堪ってくる
日向はそそくさと病室へと戻った

～次の日～

日向の病室にはかなた、将季、拓海、蘭、新一、志保、園子がいる
日向はなぜなのか分からない

とりあえず、お見舞いだということは分かっていたのだが、それにしても荷物が多すぎる

それに皆少しお洒落

「えっとー、日向はちょっと席をはずしてくれない？ということで男子群日向をヨロ～。」

かなたがいうと将季は「任せとけ」と少し気合が入っている、拓海は「うん」と頷き
新一は少し黙ったが承知した

「日向、ＧＯ！」

将季が言うと日向は「私はアンタの犬じゃない！」と少し怒り、将季をぶっ飛ばし拓海に「行こ」といい、将季を置いていってしまった

新一も少ししてから日向たちの後を追った

将季は少しの間気絶していたが、再起すると、再び皆の後を追った

甘酸っぱいモノ：２１（後書き）

次回も見てくださーいｍ（　）ｍ

千「何でアンタ、行き成り新一にしたの？」

日「だって…諦めきれなかったって言ってるでしょう！？何回も言わせないでくださいっ！」

（バコォ）

千「あ～れ～っ」

千龍風爽、日向にぶっ飛ばされる

…再起不能…

日「あっ…ま、まぁ、見なかったことに…。次回も見てくださいね。評価や感想も待ってます。」

ｂｙ千龍風爽

甘酸っぱいモノ：22

「…あ、しょーき、戻ってきたんだ。」

日向は慌てて走ってきた将季をみて呟くように行った
将季は走ってきたのか微妙に息切れしている

「戻ってきたんだじゃねーよ。俺様をぶっ飛ばしたのはドコのドイツ？」

「…ねぇ、将季、いっつも思うけど、俺様っていうの自分で言うの止めてほしいわ。うるさい。」

キッパリ言う日向に苦笑する将季
拓海も「日向の言うとおり」とうんうんと頷いた
新一は将季の元へ行き「落ち込むな」とグッドラック

「ばっかやろ！俺がそんなことでいじける奴か？…いーや違う！！」

「…バカ。」

拓海が将季を面白半分なのかは分からないが少しの笑みで将季を叩いた

「…しょー、ココはドコですか？」

「…ビョーインデス。」

「はい、ということはどうすればなりませんか？」

「シズカニシナケレバイケマセン。」

「わかってんなら気をつけよ？」

固まっている将季に笑顔で頷く拓海
流石に新一もびっくりしたのか鳥肌が立った

「なぁ、拓海っていつもこんなんなのか？」

新一が日向の耳元で聞く
日向は冷や汗をたらして「う・うん…。」と苦笑しながら頷く

「…ねぇ、工藤君、昨日はごめんなさい。私、我を忘れてやってたみたい…。
でもこれで分かってくれました?…私、工藤君に恋をしていたんです。」

と日向
新一は驚きもせず、ただ日向を見ていた

「でも…諦めます。工藤君には蘭ちゃんがいるもん。私の恋はかなわないって分かってたんだもん。
だから意地になって工藤君にキスしちゃったんだ。」

「…日向と新がキスゥーっ!?」

将季が日向の耳元で大きな声で言った
耳を塞ぐ日向
拓海も驚いた
しかしもっと驚いたのは…
「…どういうこと?」

日向たちを迎えに来た蘭だった

「「蘭（ちゃん）」」

蘭は何も言わずその場に少しの間立ち尽くし、少しの間日向と新一を見つめてその場を逃げるように去っていった

４人は蘭の後を追うために一旦、病室に戻ることにした

日向は少し深呼吸をしてから病室の扉を開けた

「…ＨＡＰＰＹ　ＢＩＲＴＨＤＡＹ！！」

突然の声にびっくりする日向

「えっ？」

目を点にする日向

「今日は日向、アンタの誕生日！！」

かなたが日向の元へ来て言った
日向は少し黙り「あ、そっか」とポンと手を叩いた
かなたは「何言ってるの」といわんばかりの目
日向は苦笑して謝る
そして日向はチロリと蘭をみた
蘭は悲しそうな顔をしながらも拍手して「ひなちゃん、おめでとう！」といってくれていた
日向は有難うとお礼を言ったがその笑顔を見るに耐えなかった

甘酸っぱいモノ：２２（後書き）

次回も見てください。

ｂｙ千龍風爽

甘酸っぱいモノ：２３

日向の誕生日パーティーは院内ながらも盛大に行われた
今は、日向へ送るもの…誕生日プレゼントを渡す時間即ち…
〈Ｆｏｒ　ｐｒｅｓｅｎｔ　ｔｉｍｅ〉
である

「ひなちゃん、これ、私と志保さんと園子と…新一…から。」

蘭は少し悲しそうな顔をしながらも頑張って笑顔で日向にプレゼントを渡す

「蘭ちゃ…」

日向が蘭の名前を呼び終える前に蘭はただ日向を抱きしめて「おめでとう！」というだけだった
日向は少し顔が暗くなる
かなたと志保、そして園子は何がおきたか分からないため様子を伺う

「…ねぇ、開けても…いい？」
少しでも雰囲気を変えようと少し照れくさく振舞う日向
園子は「勿論」というと日向は少し嬉しそうに袋を開ける

「…ぅわぁ…。可愛い…これ、本当に私にくれるの？」

4人からのプレゼントは春夏秋冬関係なくオールシーズン着用できる上着
日向の好みにあっているデザイン

「もう少しで夏が来るけど病院だからたまには涼しいときもあると思って…。」

と志保
日向は本物の笑顔になり、上着を抱きしめた

「有難う！！園子ちゃん、志保ちゃん、蘭ちゃん、そして工藤君！大事にするね！！」

お礼を言う日向

蘭は少し暗い顔になる、志保と園子は少しつられて笑顔になった
新一は蘭と日向を見つめていた

そして誕生日パーティーが終わると皆、帰る用意をし、帰っていったが、蘭だけは日向の病室に残った

「…ひなちゃん…、あのね…」

「うん、わかってるよ…。全部…全部、私が悪いの。私が工藤君にキスなんてしたから…。」

と日向
蘭は顔を下に向ける

「じゃあ、何でキスなんてしたの？私への復讐なの？」

恐る恐る聞く蘭

「そんなつもりは一欠片もなかった…。」

「じゃあ、どうして…？」

蘭が聞いた

「好きで好きでしょうがなかった…もう私にはアタックする時間なんてなかった…私には時間がなかったんだもの。
それに行動に移るのみという思考しか私の中にしかなかった。我を忘れてたの。ごめんなさい…。
自分勝手な行為をして…。本当に今回のは自分勝手すぎた…。
その感じだと工藤君のファーストキス、奪っちゃったみたい…。
でもね、蘭ちゃん私が言うのは相応しくないかもしれないけど、女って内気だろうが消極的だろうが好きな人のコトになると心の悪魔に取り付かれて、女は悪魔になってしまうの。」

日向の発言に蘭は言葉に詰まる

「別に悪魔になろうが関係ない。だってそれなら私も悪魔になっちゃってるんだから…。」

日向は目を丸くする

「そうだね、蘭ちゃんも工藤君に好意持ってるもんね。」

と日向
蘭は小さく頷いた

「新一は…ひなちゃんに渡さない。私だって新一が大好きだもん。」

と蘭。日向は蘭を小さく微笑みながら見た

「うん、そういうと思った…。じゃあ試してみない？どちらか本物の悪魔（デビル）か…。」

日向が言うと蘭は小さく頷いた

甘酸っぱいモノ：２３（後書き）

次回も宜しくです～

ｂｙ千龍風爽

甘酸っぱいモノ：２４

「…とは言ったものの…どうすればいいんだろ…。」

蘭がいなくなった病室で日向は１人呟いた

「失礼します。空河さん、検温ですよ…。」

１人の女看護士が入ってきた
日向は小さく返事をする

「…日向？日向だよね！？…うわぁ、久しぶり…！！」

女看護士が日向に聞く
日向は「久しぶり」という言葉に目を点にし、「は？」と聞き返す

「あ、日向、私のこと覚えてない？鼠藍（そら）だよ。イトコでしょ？」

と鼠藍、日向は少し考える

「…あぁー…鼠藍さん！！お久しぶりです。日向です。看護士になったんですね。ナース服よく似合ってます！！」

と日向
鼠藍は小さく笑う

「何かね、空河日向ってみたとき、日向と同姓同名だなって思ったんだけどまさか当の本人だったとはね。
前の日向の担当の看護士さんが産休に入っちゃって、その間、私が日向の担当になったのさぁ。
宜しく〜。一応、結婚して名字変わってるからね？前宮から、黒崎に。」

と鼠藍

「ねぇ、顔色あんまよくないけど、大丈夫？気分でも悪いんじゃない？」

鼠藍が心配そうに聞く
日向は脇に挟んでいた体温計を取り出して「熱はありませんから大丈夫です」といいながら鼠藍に体温計を渡した

「じゃあ…恋の病？」

小さく笑いながら聞く鼠藍

「…ちっ・違います！！」

赤面しながら言う日向

「あ～、こりゃ、図星だね。」

と鼠藍

日向は茹蛸のように真っ赤になる

そのとき…

「ひなちゃん…。」

蘭が病室に入ってきた

日向の顔が曇る

鼠藍はそれを見逃さなかった

「失礼ですがどちら様でしょうか？」

鼠藍が聞く

「あ、はい、私、日向さんと同じ高校に通って同じクラスです、毛利蘭です。」

お辞儀をする蘭
鼠藍もお辞儀をする

「…蘭ちゃん、せっかく来てもらったのは嬉しいけど、帰ってくれない？今日は調子が優れないの。」

日向が言うと蘭は少し俯いて黙る

「…そっか、お大事にね、ひなちゃん…。では、失礼します。」

蘭は日向と鼠藍にお辞儀をして、その場を逃げるように去った

「…日向、私も1回、他の患者さんの検温終わってないから私も行くね。じゃあ、また後で来るから。」

鼠藍は日向に言うと日向は「はい、お仕事頑張ってくださいね」と笑顔で鼠藍を見送った

甘酸っぱいモノ：２４（後書き）

次回も見てください。

ｂｙ千龍風爽

甘酸っぱいモノ：25

「えぇっ！？一時退院ですかっ！？しかも…1ヶ月も…！！」

日向が驚いた
鼠藍はうんうんと笑顔で頷いた

「でも1ヶ月の退院が終わったら、病院での生活になっちゃうんだけど…。」

少し悲しい顔をしていう鼠藍に首を横に振る日向

「いいえ、承知してましたから…でも1ヶ月なんて本当にいいんですか！？」

再び聞き返す日向
鼠藍は何も言わずうんと頷いた

「大体それくらいあれば学校生活も楽しめると思って…。でも、担

当の先生も言ってたことをもう1度言うよ。
苦しくなったり、何か異常を感じたって時は絶対に私の携帯に電話すること！！
かなちゃんとか将ちゃんとか、たっくんも知ってるんでしょう？
協力してもらいなさい。何かあってからじゃ遅いから。そして、一応、何日か1に回、私、日向の家に訪問に行くから。簡単に言えば往診？…とりあえう、分かった！？」

鼠藍がいうと日向は笑顔ではいと返事

そして翌日、日向は一時期退院した

日向はタクシーに乗って家へと向かっていた

「いやっほぉーいっ！！日向ーっ、待ってた待ってた待ってたよーっ！！」

日向の家の前でかなたが待っていた、そしてあの幼馴染達…

「よぉっ、日向、久しぶりだな！元気か！？」

将季。

「お久。」

プラプラと手を振る拓海

「皆ぁっ！！」

日向はかなたに抱きついた

「あのね、1ヶ月間、また皆と一緒に学校に行けるんだって！！」

「マジかっ！？やったやったやったぁーっ！！」

かなたは今よりも日向を強く抱いた

「俺様と登校できるのか？嬉しいだろ？俺様との登校は貴重だからなぁっ……っ聞けよオメーらっ！！」

将季の言葉を無視して皆、日向の家へと入っていった

甘酸っぱいモノ：２５（後書き）

短いですが次回も見てくださいゞ（＊´∀｀＊）ノ

ｂｙ千龍風爽

甘酸っぱいモノ：26

「…ふわぁぁー…」

日向が起き上がる
今日から再び学校へと行くことになってる

日向は少し胸を弾ませながら制服に身を包む

いつもみたいに…いや、彼女にとっては久しぶりに家で朝食をとり、洗顔、そして時間割をそろえ、少しゆっくりし、かなたが迎えに来たと同時にローファーを履き、家を出た

そして拓海の家により、拓海を迎えに行き、最後には将季の家へと向かった

「将季ぃっ！！学校行くよーっ！」

かなたが大きな声で呼ぶと少ししして眠たそうに頭をかいて、将季が出てきた

「はよ…。」

眠たそうに言う将季に皆、挨拶を返す

「あ、あのね、皆に話さなきゃいけないことがあるんだけど…。私、まだ病気が完全に治りきってないって言うか…治らないんだけど、まだ病状は安定してるんだけど、たまに苦しくなったりするんだ。
そのときは…協力お願いしていい？」

と日向
3人は顔を見合わせる

「なぁーに言ってんの！協力すんに決まってんじゃん！！ね？」

かなたは将季と拓海を見て聞いた

「勿の論に決まってんだろ！」

「出来ることがあれば。」

と将季と拓海

日向は心のそこからお礼を言った

「あれ？ひなちゃん？…なんで？」

声が聞こえた
皆、振り向く

「…蘭…ちゃん？」

蘭、新一、志保がいた

「あら、退院したのね。」

と志保

「…別に…一時退院しただけです。…もう、行こ。」

日向は少し寂しそうにいうと学校へと向かった
蘭はその後姿を見て呟いた

「…お願い、もう逃げないでよ。」

と…

「…はぁ…。」

日向は教室で1人溜め息をついた
しかし、逃げられない。

蘭と新一、そして志保と同じクラスだからだ。しかも新一と志保の間に挟まれている

将季と同じクラスだが、将季と席が遠いため、なかなかいけない

仮に将季の元へ行ったとしても女子の視線が日向に集まり重圧(プレッシャー)が日向を襲う

「…ねぇ、新一ってば!!」

蘭の声が聞こえる
日向は慌てて立ち上がり、かなたの教室へと行こうとしたが、出来なかった

蘭に腕をつかまれていたから

「お願い、ひなちゃん…、逃げないで。」

「…私、この前、病院でどっちが悪魔か対決しようって言ったじゃない?
私は、工藤君を手に入れるためなら何だってする。例に工藤君の

唇を奪った。
　蘭ちゃん、工藤君のこと好きなんでしょう？好きなら正々堂々と告白したら？皆の前で…。」

日向の言葉に蘭は目を丸くした

「…ひなちゃん？」

聞き返す蘭、なぜならもう今までの日向とは雰囲気も口調も全く違っていたから

「もう私は昔の私じゃないの。簡単に言えば猫を被ってたってこと。…正確に言えば裏と表があるってこと。悪魔対決…この場で告白しなかったら工藤君は私が奪う。」

日向は不適に笑いながら言った
蘭は絶句した

「告白、勿論、するよね？…好きなんだもんね？工藤君のことが…。あと…１０秒前。１０…９…」

日向がカウントダウンする

しかし蘭は行動に移ることが出来ない

日向は小さく笑いながら時計を見てカウントダウン

「…3・2・1・0…。時間切れ(タイムオーバー)。」

日向は時計から目を放した、と思ったとたん…

「!!!っっ!!」

再び新一にキスをした

クラス全員の目が日向と新一に向いた

甘酸っぱいモノ：２６（後書き）

あぁ、ひなちゃんやっちゃいましたねぇ…ゞ（＊´∀｀＊）ノ↑やらした本人ｗｗ
何か次回は波乱の嵐かも…

次回も見てください（＊＾＾）ゝ
感想等も待ってます～

ｂｙ千龍風爽

甘酸っぱいモノ：27

「ちょっ…」

園子は流石に驚いたのかすぐに新一と日向を離す

「ねぇ…ちょっと、空河、アンタ、何やってくれたのよ！！」

紗沙率いるグループが日向の前へと現れた

「ただやりたいことやっただけですが何か問題でもありますか？」

もう普通の日向ではない

「アンタ…ふざけないでよ！！今のは完璧アンタが悪い！！確かにアタシも毛利のこと恨んでたけど今の件では毛利の肩を持つことしか出来ないよ！！」

「勝手に思っててください。」

キッパリ言う日向

紗沙も流石に堪忍袋の緒が切れたのか日向につかみかかろうとする

「少し落ち着きなさいっ」
志保は咄嗟に紗沙を抑える
しかし紗沙の力に振り切られ紗沙はツカツカと日向の前に来て日向の頬をビンタ
日向は頬を押さえる

将季も拓海も流石に驚いたのか日向の元へと向かう

「…日向、ちょいやりすぎだって…。」

日向の元で拓海が言う

「やりすぎなんかじゃない！！…っっ…くぁ…」

興奮してしまったためカッと熱くなってしまったのか胸の痛みが日向を襲う
日向はふらつき、倒れそうになる

「日向っ…」

支える将季
日向は息が荒くなっていく

「拓海…ちょ…薬！！」

「うん！！」

拓海は日向の鞄から薬をだし、将季に渡す

「日向っ…薬！！…飲めるか！？」

将季は薬のケースから薬(カプセル)を取り出し「飲め」と日向の口に放り込んだ

「…ん…」

飲み込んだらしい

「将季、保健室。」

「あぁ…。」

将季は再び日向を抱えなおして、拓海と共に保健室へと向かった

その途中、拓海はかなたの教室へ行き、事のあらましを説明

かなたも拓海と共に保健室へと向かう

蘭、志保、新一、そして園子も保健室へと向かった

「…日向…ひなっ…」

涙ぐむかなた

「…かな…ちゃん…」

かなたは顔を上げる

日向が目を覚ましたみたいだ

「日向…大丈夫！？」

とかなた
日向は小さく頷いた

「はぁ…良かった…日向、お前、興奮しすぎなんだって…誰だっけ？イトコの看護士様にも言われたんだろ？
怖ぇ、顔されて…」

「それはどんな顔？」

後ろから優しい声
将季はクルリと何食わぬ顔で振り向く
クルとフワフワとした胸元まである髪
そしてすらりとしたスタイル
まさに鼠藍

「…誰っすか？」

満面の笑みで言う将季

そしてそこで拓海の一発

「見てわからない？多分、日向の大イトコ様だよ。」

と拓海

将季は謝る

小さく笑う鼠藍

「…鼠藍さん！！」

起き上がろうとする日向

「あぁーっ、起き上がらなくてもいいからっ！！」

鼠藍は慌てて日向を支える

「ごめんなさい、無茶をしてしまい…」

「本当に貴女、いつ死んでしまうか分からない体なんだからもう少し労って…ね？」

日向は再び頭を下げる

「かなたちゃん、将季君、拓海君、有難うね。」

小さい笑みで礼を言う鼠藍

「…工藤君…ごめんなさい。蘭ちゃんも…」

日向は謝った

「謝ったって許すわけないでしょ！！」

と園子

顔が曇る日向

鼠藍は全く状況がつかめない

「…ねぇ、何があったの？」

鼠藍は志保に聞く

志保は少し躊躇っているようだが状況を説明した

甘酸っぱいモノ：27（後書き）

千「今日は鼠藍が登場してくれましたぁ。」

鼠「初めまして、黒崎鼠藍です。」

千「看護士さんなんだよね。」

鼠「うん、結構大変だよ。夜勤もあるし重労働だし…」

千「えっ？将来看護士になろうと思ってたのに…」

鼠「止めたほうがいいよ。うん…あ、次回も見てね～。感想も待ってるよ～。」

ｂｙ千龍風爽

甘酸っぱいモノ：28

鼠藍は話を聞くと「…そう」というだけ。段々顔が暗くなっていく。

「…日向、今日、貴女を見舞いに来たのもあるけど、宣告に来たのよ。」

日向を除く全員の目が丸くなる

「余命ですよね？」

滅多に自ら口を開かない拓海が口を開いた。

頷く鼠藍に皆、日向に目が向く

「この前、退院する直前に行った検査の結果が出たの。思ったより進行が進んでて、もう本当に危ない状態で、1ヶ月って言ってたけど、そろそろ入院しなくちゃいけないくらいまで進行してたの。

もし入院して、治療を受ければ危機的な状態からは脱出できる。

そして、今は医療技術も進歩してるから、手術を受ければ、余命

というのもなくなって、完全に治る確立も少しだけなら出てくるわ。
」

「…もしも受けなかったら？」

日向は冷静に聞く

「あと3ヶ月も持たない。」

「…っ」

日向は短さに顔を下に向ける。
かなたたちも短さに圧倒されて声も出なくなった

鼠藍は冷静。

「確立ってどれくらいなの？」

日向は顔を下に向けたまま聞く

「本当に低いよ。…４０％いくかいかないか。」

少しの沈黙の後、鼠藍は口を開いた

「…私は日向に治療を受ける選択をしてほしいけど、強制はしない。貴女が決めるのが第一だから。
治療するなら私達側だって全力でサポートするし、受けないのなら苦しまないようにもサポートできる。
ーどうするの？」

鼠藍の言葉を聞いたあと、誰かがゆっくりと口を開いた

「日向、お願い…、受けて。まだ生きれる確立があるんなら、私は日向に生きてほしい。」

かなただった。滅多に泣かないかなただが、泣きながら日向に訴える。

「私もかなたちゃんと同じだよ。確かに私は新一を奪われたけど、ひなちゃんと友達でいたいって気持ちは変わらない。」

蘭は泣きながら、日向の手を取る。
日向は俯けていた顔を上げ、蘭の顔を見る。
いつもの笑顔の蘭。
それから皆も日向に言葉をかける。

日向は少し黙り込んだ

皆、日向を見つめている。
少しの沈黙の中、日向は口を開いた。

「――……私は……――」

甘酸っぱいモノ：２８（後書き）

次回も見てください～ゞ（＊´∀｀＊）ノ
感想等も待ってます～

ｂｙ千龍風爽

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4149u/

甘酸っぱいモノ

2011年12月29日10時49分発行